

明日 への 話題

より魅力的な 株式市場を 目指して



東京証券取引所
代表取締役社長

みやはら こういちろう
宮原 幸一郎

今年、日本に株式取引所が開設されてから140年目。株式市場は、投資家と上場会社の双方がなければ成り立たない。それぞれのニーズに応えることで、わが国の株式市場も成長を遂げてきた。

東京証券取引所の市場構造も、様々な時代の要請に応じてきた結果、現在の構成になっている。戦後、運営していた市場は、今でいう市場第一部のみで、市場第二部が創設されたのは、高度経済成長のさなかである。中小企業の株式が店頭で盛んに取引され、投資家保護が喫緊の課題となったため、当時の店頭取引が市場第二部となった。その後、非上場会社の資金調達の間として誕生した店頭登録銘柄制度が、現在のJASDAQの起点である。

一方、新興企業向け市場というコンセプトが誕生したのは、バブル崩壊後の1999年。日本経済再生のため、新たな産業育成の重要性が高まると、成長企業の資金調達ニーズに応えるため、新興企業向け市場マザーズが創設された。

このようにわが国の株式市場の変遷を辿ると、企業の規模や成長ステージごとに市場が創設され、投資家のニーズにも応えてきたことが分かる。

情報通信技術等の発達により、資金の出し手と受け手を結びつける手段も効率化、多様化しているが、株式市場は、リスクマネーの供給の場として、今後も十分にその機能を発揮することが求められる。また、グローバル化という観点からは、国境を超えた投資を獲得するための国際的な市場間競争も激しさを増している。

こうした状況においても、我々が目指すべき株式市場の姿とは、安定した市場基盤を備え、多様な投資家層が参加をし、投資対象である上場会社自身が魅力的な市場という点は不変であろう。一方で、国内外におけるVC投資やM&A等の増加、また異業種の証券業への参入やAIを活用した資産運用の広がり等といった企業、投資家を取り巻く環境変化にどう適応していくのか。

そのため東京証券取引所は、本年10月に「市場構造の在り方等に関する懇談会」を設置し、株式市場の構造について有識者との議論を開始した。これからの時代に、投資家と上場会社双方のニーズに応える魅力的な市場とはどのような姿であるべきか、今一度、再考してみたい。